

ヤンバルの風

上 原 孝 三

(沖縄尚学高等学校教諭)

那覇から高速道路に乗り、風景を見る。2・3月のヤンバルの山は新緑におおわれ美しい。那覇から名護に着くまで、緑の色が3回(3地域で)変わる、とヤンバルに住む友人に語った。友人が言うに、ヤンバル出身の地理学者は「6回」だという。しかも、風の匂いもそれぞれ異なる、と言ったそうだ。那覇に住む人間には、風の匂いなど全く思いもよらなかった。

沖縄文化研究の中心は、『おもろさうし』だった。『おもろさうし』は奄美・沖縄地域の宗教儀礼歌謡集とも規定されるべき書物である。巻1は古琉球期の1531年に成立した。その内容は多岐にわたり、極めて複雑である。

オモロは、言語・文学・民俗・歴史・宗教・神話など様々な学問領域の研究対象ともなり、その研究は沖縄研究の要であり、沖縄文化史、ひいては日本文化史を明らかにするに必要かつ貴重な歌謡である。

オモロ研究は、田島利三郎・伊波普猷・仲原善忠・比嘉春潮・金城朝永など優れた「沖縄学の先駆者」によって推進されてきた。その後、仲宗根政善・外間守善・池宮正治・高橋俊三・玉城政美の諸先生方の労力もあり、研究が深化・普及の道をたどってきた。本大系の仕事もそのような琉球文学研究、オモロ研究の流れに位置するものであろう。

『琉球文学大系』(全35巻刊行予定)の先陣を切って『おもろさうし』が世に送り出されるのは蓋し当然のことと言えよう。「沖縄学」の後継者たちは、どこまで「沖縄学」を貫く

かの問題を、課題として負わされているのではあるまいか。だが、すくなくとも『琉球文学大系』を編むことによって、沖縄研究の到達点を確認し、「沖縄学」を包括的に理解することができ、「沖縄学」の真価も明らかになるであろう。そしてまた、研究課題もみえてこよう。

大正12(1923)年の夏・7月末、折口信夫は沖縄の辺土名にいた。数日で国頭村を徒歩で一周しようと企てた。本島北部に聳え立つ与那覇岳、交通不便な東海岸。夏8月に国頭村一周を決行しようという無謀な旅で、折口はノロと会い神歌キューナを聴いている。ノロや神アシャゲもカメラに収めた。「沖縄探訪」の旅で折口の得た最大の収穫は、周知のように「まれびと論」だった。

大正9年の末、柳田国男は『海南小記』の旅に出た。大正10年1月には国頭に入り、瀬嵩で1泊している。あれほどに日本民族の信仰の原型を探り求めた日本民俗学の二大碩学、柳田・折口の沖縄ヤンバルでの発見は、「来訪神」だった。日本人の神の祖型に関する両者の見解が、そこにはみえる。「沖縄学の父」と称される伊波普猷への柳田・折口両氏の学問的影響は決して小さくない。

「沖縄学」の風は、いま新たにヤンバルの地から立ち上がり確実に吹いている。その「風」を「沖縄学の先駆者」達は、オボツカグラの世界から静かに、あるいは莞爾として見守っているのであろうか。

「諸書物点入係」の仕事と琉球文学大系編集刊行事業

麻 生 伸 一

(沖縄県立芸術大学准教授)

近世期の首里王府で政治課題を検討する際、議題によっては多くの文献が参考とされた。たとえば 1840～50 年代に展開された尚濬（しょうしゅん・尚泰王の兄）の位牌を安置する場所や、尚泰王による参拝をめぐる審議では、『文献通考』『欽定春秋』『欽定礼記』『朱子家礼』といった制度史・儒教関係書などのほか、『大清会典』『礼部則例』などの同時期の中国王朝の行政大綱・行政実例集も参照された（拙稿「王兄尚濬の祀り方」『琉球沖縄歴史』1号）。

参照された文献は漢文体のものも多かったが、これらのテキストにはほぼ返り点や送り仮名が振られ、文字によっては語意が書き加えられていた。徐葆光が久米村の「明倫堂」の左右の廻廊には、経書と書籍を収納しており、ほぼ整っている（『中山伝信録』巻5）と記録しているように、王府の主要施設には大量の書籍が保管されており（真栄平房昭「和漢の境界を越えて—琉球における書物文化の受容—」『第11回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』）、これらの書籍には解釈しやすいように返り点などの処理が施してあったであろうことが想像される。

漢籍の保管をしていた久米村方で、写本や返り点、送り仮名の記入などの作業を行っていたのは「諸書物点入係」であった。1876年にこの業務をつとめていた久米村方の三人の諸士は王府に対し業績評価・処遇の検討を要請する文書のなかで、自身の職務内容をつぎのように説明している。

われわれは、毎日朝から晩まで業務に取り組んでいる。われわれが担当した諸書は、『明臣奏議』（1部、1186枚）、『南聘紀考』（2部、552枚）、『球陽』（25冊、882枚）であり、およそ四年かけてこれらの点入れと写本を行った。とくに大変

だった作業は『明臣奏議』である。いわゆる四書五経はよく読まれる書物であり、点入れされた本や解説本もあるが、『明臣奏議』には参考となる書籍がないためさまざまな文献を読みながら担当役人で協議して作業をすすめた。『南聘紀考』、『球陽』も冊数が多く難儀な業務であった。さらに、毎日勤務していたために、文組役（清朝向け国王発給書状の文案作成者）や講談師匠などの席が空いて選抜試験が実施されても勉強する時間がとれなかった。（意識、尚家文書463「訴訟」）

王国末期にあっても担当者の処遇が決定されていない点を踏まえると「諸書物点入係」は臨時職であったようだが、王府の政策審議に不可欠となる資料を読み解きながら編集するのは重要な業務であったに違いない。

たとえば、上記要請文には薩摩藩が琉球を附庸であると指摘した『南聘紀考』が登場する。『南聘紀考』から薩摩藩の意向を読み解くための基礎作業として「諸書物点入係」の業務が位置づけられるだろう。

また、久米村方の要職にあった神村親方らが「諸書物点入係は力量がないと任せることはできないし、かれらの業績評価を軽んじては、辞退者が増加して今後の人選に支障がでるだろう」（意識、同上）とコメントを残していることから、当該業務の重要性が分かる。

「諸書物点入係」の業務と琉球文学大系編集刊行事業に共通するのは、資料を使いやすく理解しやすいものとする点にあると思う。近いうちに「毎日朝から晩まで」作業に当たることになるだろうと恐々としているが、今の人びと、将来の人びとにとって有用かつ有意義な編集ができるよう心がけたいと「諸書物点入係」の職務内容を読んでいて感じた。

2020 年度 上半期業務報告

(4 月～9 月)

令和 2 年度第 1 回「琉球文学大系」全体会議の開催延期が決定

6 月 27 日に学内施設で予定されていた令和 2 年度第 1 回「琉球文学大系」全体会議（執筆・編集者会議）の開催延期が決定されました。

4 月から 5 月にかけて全国的に新型コロナウイルスの感染が拡大したことに伴い、国や県が緊急事態宣言を発令。名桜大学でも危機管理委員会のもとタスクフォース会議（座長：砂川昌範学長）が組織され、学外者の入構禁止や学内の施設利用制限などの感染対策措置がとられました。編集刊行事務局では、全体会議の開催について学内タスクフォース会議の決定・推移を勘案しつつ、当初は 9 月 12 日に開催延期としましたが、その後も収束の目途が立たないことから再度開催延期とする運びとなりました。

第 1 巻「おもろさうし（上）」、編集作業を業務委託で調整

2021 年度に刊行が予定されている第 1 巻「おもろさうし（上）」の編集作業を県内印刷所に一部業務委託する方向で調整に入りました。

当初は、本年度より編集刊行事務局でインデザインソフトを活用した編集作業を行う予定でした。しかし、コロナ禍での人材確保が困難な状況となったため、環太平洋地域文化研究所および名桜大学総務課を中心に数回に亘って協議を行い、編集作業の一部を業務委託する方向で進めていくことが決定されました。現在、業務委託先の業者選定を進めており、年内にも具体的な編集作業に入っていくことが計画されています。

「琉球文学大系」編集刊行事務局事務所を移転

5 月 19 日、環太平洋地域文化研究所 2 階に新たに「琉球文学大系」編集刊行事務局事務所を移転しました。

新事務所は、旧事務所に比べて面積が 2 倍ほど

広くなり、作業スペースもゆったりと確保できるようになりました。

新事務所では、毎週事務局内会議が開催されているほか、昨年 9 月から引き続き週に 1 回、第 24 巻「琉球和文学（上）」班作業部会（学内委員 5 名）のテキスト検討会も行われています。



第 24 巻「琉球和文学（上）」班作業部会のテキスト検討会の様子＝9 月末、「琉球文学大系」編集刊行事務局

希少図書『鹿児島県史料』を新規購入

前年度、要望のあった『鹿児島県史料 旧記雑録追録』（全 8 冊）、『鹿児島県史料 忠義公史料』（全 7 冊）、『鹿児島県史料 斉彬公史料』（全 4 冊）を新たに購入しました。『鹿児島県史料』を所蔵する沖縄県内の公共図書館は限られております。是非多くの皆様にお役立ていただけましたら幸いです。現在、貸し出し等のサービスは行っておりませんが編集刊行事務局事務所にて閲覧・複写を行うことができます。また、本事業に関わる図書資料の購入も随時行っておりますので、リクエスト等ございましたら編集刊行事務局までご一報ください。



今回購入した『鹿児島県史料』＝7 月 22 日、「琉球文学大系」編集刊行事務局

北琉球のうた探訪—解釈と鑑賞（2）

サヨサ節（伝承地：鹿児島県与論島）

1. 与論ちゆる島や いにくさやあしが
鍋ぬ底なかに サヨサ 五穀ぬたまる

【訳】与論という島は小さい島であるが、鍋の底に五穀が溜まるような豊かな島だ。

2. 打ち出しより出しより 誠打ち出しより
誠打ち出しば サヨサ 何恥かちゅんが

【訳】はっきり言いなさい言いなさい、誠実に言いなさい、誠実に言うとなんの恥をかくことがあろうか。

3. 親加那志御蔭 人程やなとてい
親加那志事や サヨサ 粗相や知らぬ

【訳】親のお陰で一人前になっている。親のことは決して粗末には致しません。

4. だんじゅ生ちあたる だんじゅ育ちあたる
我子ぬ面みちゅてい サヨサ 何倦ましやんが

【訳】心から産んだ、心から育てた我が子の顔を見て何の辛いことがあるだろうか。

昨秋、私は与論島に渡った。その折、島に詳しいある老嫗が私に歌って聞かせてくれたのが上記の歌である。

1 首目は、与論を称えた土地褒めの歌である。奄美諸島と沖縄諸島の間に浮かぶ与論を“鍋の底”に喩え、そこに溜まる豊かさを“五穀”という言葉で表現したところはなんと面白い。かつては、人々の交流もさぞかし盛んだっただろう。こうした地理的環境がこのような表現をうみだしたのだろうか、と思わず想像してみたい。 「いにくさ」は小さいものの意で、「サヨサ」は歌の調子を整える囃子詞。2 首目以降は、いわゆる教訓歌である。偽りなく誠実に人道を歩むこと、親がいてこそ今の自分があること、そして親になってからわかる我が子への思い、どれをとっても心に響くものがある。『与論島の民謡と生活』を書いた栄喜久元によると、1 首目と 2 首目は与論島民の精神を象徴するもので、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、人々の心の支えとして歌い継がれてきたという。

歌詞の中には、「びちゅ（人）」（p 音の保存）や「ふとう（事）」（k 音→h 音）など、所々に与論方言の特徴がみられる。しかし、その骨格は八八六音を基調とする琉歌である。老嫗によれば、この歌は本来三線にのせてうたわれるという。旋律は沖縄の国頭ジントーヨー（別名：むちはじき節）の系統であった。（石川恵吉）

「琉球文学大系」新規関係委員の紹介

本事業の関係委員に、このほど先田光演氏（えらぶ郷土研究会）、町健次郎氏（瀬戸内町立図書館・郷土館）が新たに加わりました。先田、町両氏は第 6 巻「琉球歌謡—奄美篇」を担当します。

事務局職員の人事異動—2020 年 4 月

研究協力係長 【転出】神谷順子（教務課学生会館運営室） 【着任】市原 修（前・図書館図書課）

「琉球文学大系」関連記事目録—2020 年 4 月～2020 年 9 月

波照間永吉「＜連載＞沖縄からの声 [第 IV 期] 2 / 「琉球文学大系」の構想」『月刊 機』No.340（藤原書店, 2000, 7）

各巻担当委員の皆様へ 令和 2 年度第 1 回全体会議（編集・執筆者会議）開催のお知らせ

現時点では、新型コロナの状況が沖縄県の緊急事態宣言を解除した 9 月時点のまま推移し、好転がみられましたら 12 月中に那覇会場で開催を予定しております。詳しい日程等については決定次第追って通知いたします。何卒ご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。